子どもの歌を考える
―「どんぐりころころ」「雪」をとおして―

野々村　千恵子

A Research on Children's Songs Singing Mistakes

Nonomura Chieko

Abstract

This research is Concfrned with why the Childrens's School Songs,"Donguri-koro-koro," and "Yuki (Snow)," have been sung incorrectly.

"Donguri－koro－koro," has been sung, "donguri－koro－koro don**gu**ri－ko." It should be sung, "donguri－koro－koro don**bu**ri－ko."

"Yuki," has been sung like, "Yukiyakon**kon**," the correct form is, "yukiyakon**ko**."

These are important Japanese songs, so if they are sung incorrectly, they should be emphasized.

Received Oct. 31, 2000

Key words : singing song mistakes
children's school songs
songs words／lyrics

I　はじめに

近頃、日本の歌を巡って一冊の本が話題になっている。声楽家の藍川由美氏の著作・文春新書の『これでいいのか、にっぽんのうた』(1998.11) である。書名もさることながら、帯に書かれた文章「出版楽譜は誤植だらけ、詩は勝手に改作――日本人よ、自国の歌にもっと自覚的であれ！」が刺激的である。この著書の四ヵ月後、朝日新聞 (1999.3.18) の夕刊〈にゅうすらうじん〉では「歌は時代の空気を一番はっきり表している」と言い、「日本人の歌の出発点は童謡、人が歌を歌うという基本は自分の心情を歌うこと」と自分の演奏活動の姿勢を語っている。また、月刊誌『文芸春秋』(1999.5) の巻頭随筆欄に「西洋音楽コンプレックス」と題した文章も発表している。

藍川氏のこの著書を受けて、天理大学の前田均氏は、天理大学国語国文学会の研究誌『山邊道　第四十三号』(1999. 3. 25) に「声楽家の日本語音声認識への疑問―藍川由美著『これでいいのか、にっぽんのうた』の検討―」、『同　第四十四号』(2000. 3. 25) に「続・声楽家の日本語音声認識への疑問―藍川由美の楽譜・歌唱の検討―」と題して論文を発表した。それは日本語音声学上の立場に立っての指摘である。藍川氏の考え方には賛成だが見過ごし得ない問題が多くあると述べ、日本語の発声について意識を改めて喚起させるものであった。

藍川氏のこのような問題提起の以前にも“日本の歌”について諸氏の提言がある。“言葉は生きている”とよく言われるように日本語の発音は変化していくものである。音楽上の制約を受ければなおさら本来の日本語の発声と変わらざるを得ない。さらに歌を歌うという行為は歌い手個々の心情が大きく作用するものであるから、歌をことに初心者に教える場合には重要で大切な問題であろう。

日頃講義をしながら遭遇した問題がある。「どんぐりころころ」の歌では、“ドンブリコを“ドングリコと、「雪」の歌では“雪やこんこ　霰やこんこ”を“雪やこんこん　霰やこんこん”と間違えて歌われているのをよく耳にするが、幼児教育に関わる一人として、このような現象を歌い手の単なる不注意と片づけていいものかと疑問を抱いてきた。藍川氏の提言を機に子どもの歌について教科書を始め各種の歌の本を調べた。歌の誕生から半世紀以上も時が経過すると、子どもたちの生活も大きく変わり、歌詞に詠み込まれた内容が理解しがたいものとなっている。紙幅の都合もあるので今回は「どんぐりころころ」と「雪」の2曲に限定して資料をもとに考察結果を述べたい。

原譜、教科書、日本童謡協会編著の楽譜、絵本となった歌の本、NHK 出版の本、その他の歌集など、実に多くの歌の本が出版されているが、藍川氏が指摘されたように誤植も少なからずある。資料を提示しながら、日本の歌が歌い継がれてきたその過程や背景についても触れ、“ドングリコ”や“雪やこんこん～”と歌ってしまう状況を明らかにしたいと考えている。

なおこの研究に使った資料は、平成11年度本学研究助成を受けて収集したものである。

II　考察

〈どんぐりころころ〉

大正10年に『かわわいい唱歌』に発表され、青木存義の代表作（楽譜１）とされている。青木は、『かわいい唱歌』を第３集まで刊行しているが、ほかにどんな曲を掲載しているか、など不詳である。どんぐりの歌の発表当時は幼稚園などで歌われていたようだが、青木はこの歌を発表したその年大正10年に亡くなり、児童文学雑誌『赤い鳥』(大正７年創刊) の童謡運動のメンバーでなかったこともあって、この歌は当時学童にはあまり歌われず、評価を受けなかったようである。しかし、白秋の主張「日本の風土や伝統、童心」を詠み込んだ作品といえる。

藤田圭雄はこのころの動静を『目でみる日本の詩歌⑩(TBS ブリタニカ 1987)』の中で「大正期の雑誌と作家たち」に述べている。北原白秋が小学唱歌を「日本の風土、伝統、童心を忘れたもの」と評し、「童謡は童心童語の歌謡」と言い切り、最初は幼児を対象とした童謡を作ろうとしていたが、やがて「少年以上の成人たちの鑑賞を期待するようになった」と述べ、芸術性を求めた作品に変わっていった経緯に触れている。

この歌の“ドングリとドジョウが出会って挨拶を交わし遊ぶ”などという情景は戦後の平和を求める機運の中では時代に合ったもので、再評価されたと推測できる。大学在学中から『赤い鳥』や『コドモノクニ』に投稿し活動していた佐藤義美[1)]は「単純で、わかりが良く、調子よくみんなに歌われる童謡—特に幼児のための童謡を作りたい」という主張を掲げ活動を開始している。このような佐藤の主張が「どんぐりころころ」の教科書掲載になんらかの影響を与えたのではないかと考える。昭和22年の文部省発行『二年生のおんがく』に採択されて人々に広く歌われるようになった。

児童文学評論家の渋谷清視は51年4月から53年3月までの2年間、中日新聞サンデー版に「童謡の世界」を連載し、その中の「どんぐり　ころころ(51.11.14)」の項に、“童謡レコードのなかで最高の売れ行きを維持している”と紹介している。その記事の中で「幼児の心を捕らえる面白さ」の見出しで“いかにも幼い子どもたちの心をとらえそうな、かわいらしく、やさしくて、いじらしくて、それでいてユーモラスな感じの、おもしろい想像の世界をつくりだしている”と評し、この歌の生命の長いことを“単純な音程の繰り返しと、リズム、メロディーが構成されていて誰にでも歌いやすいので、歌いながら想像の世界を楽しませることができるのだ”と分析している。

〔ドンブリコをドングリコと歌ってしまう背景〕

1．ドングリとドンブリの音形が全く同じ〈ソーミミ〉であり、歌い方の区別がされにくい。旋律的に見て、同型なので気安く歌い、間違われやすいと推測できる。

2．木の実のドングリは平仮名でどんぐりと表記し、コロコロの擬態語は平仮名、ドンブリコの擬音語は片仮名という表記原則が崩れて混同した。

　この調査で、文部省検定の教科書ですら出版会社によって異なり、また改訂年度によっても“表記が変わる”という実体が明らかになった。戦後は、“カタカナを教えるのは小学校2年生から”という原則に準じ、音楽の教科書もそうなったのであろう。

3．挿し絵のドングリに目鼻や手足をつけて、ドングリの坊やが登場し、それをドングリ子と名付けてドングリコと歌っている。

　昭和22年の第四期国定教科書では擬態語の「コロコロ」や擬音語「ドンブリコ」が片仮名表記である。一方、岐阜県西濃地区で昭和36年に採択された音楽教育図書株式会社版の教科書は、曲名が平仮名であるのに歌詞の擬音は片仮名、2小節ごとに歌詞に合わせた8

コマの紙芝居のようなカラフルな挿し絵が入った楽譜（楽譜２）である。まさにドングリの子どもの登場である。しかし、擬態語のコロコロや擬音ドンブリコは片仮名表記であり、この時代には間違えて歌うことはなかったと思われる。

46年版教育芸術社版教科書（楽譜３）では目鼻や手足のついたどんぐりが登場し、音楽教育図書版（楽譜４）では、目鼻や手足の上に洋服を着たドングリとドジョウが登場する。ところが擬態語は「ころころ」と平仮名にかわっているが、擬音のドンブリコは片仮名表記である。片仮名でドンブリコという語のオステナートがついているので、まだ間違えて歌うことはなかったと推測できる。

しかし、この曲が一年生の歌として採択されたとき、擬態語も擬音もすべて平仮名表記になり、目鼻や手足のついたどんぐりの挿し絵を見ていると、一年生であるだけに歌詞を間違えやすくなったといえるであろう。

4．生活が変わり、歌の情景がわかりにくくなり、ドンブリコという言葉も死語に近い。

初版（楽譜１参照）では曲名が「團栗ころころ」と表記されている。ドングリには「團栗」や「橡」の文字があてられ、狭義には櫟（くぬぎ）の実のことを指すが、広義にはブナ科の樫、櫟、楢、椎、柏などのナラ属の果実を総称していう。古代では、澱粉質に富むので重要な食料であり、飢饉時の食料を意識して農家には植えられていた。岐阜・西濃地区でも農家では家の周りに防風と防雪を兼ねて樫や柏を植えていた[2)]。櫟は幹は高さ十五メートル、径六十センチにも成長する木であるから山に植えられ、樫や椎の実に比べると丸味を帯びた大きな実である。水中に落ちればドンブンと音がして、やがて浮き沈みしながら流されていく様にはドンブリコといった擬音表現がふさわしい。一方、ドジョウは生活排水の中で生きる淡水魚、泥の底にすみ、腸（消化管の一部）でも空気呼吸をする魚なので水面に浮き上がってはまた潜る。そんな姿が子どもの目にまるで落ちてきたドングリと山の木の実と人里の魚がどうして出会えるのか、幼少の頃はずっと疑問に思い、ドングリはやっぱり細い実・樫の実のどんぐりと思っていた。昭和30年代までは、農家は水田用の川から水を庭に引き込んでよく池を造っていた。また、その川は野菜や食器を洗う生活用水でもあり、夏は子どもの遊び場にもなっていた。そんな川が農村集落の間を蛇行して流れていて、ドジョウはどこにでもいた。だが、50年代にはいると、それらの川は汚染排水のため異臭が漂い、まもなく塞がれ、上は車道に下は暗渠となってしまった。このように生活が変わってしまうと、ドングリが北風に吹かれてバラバラと落ちる光景は見られず川に落ちる水音を聞くこともできなくなった。子どもが昔話「桃太郎」を聞き、物が水中を流れる言葉を生の声で聞くことがなくなったのも大きな要因であろう。本学の学生からきまって受ける質問は「ドンブリコってなんですか?」である。逆に「ドングリコを何だと思って歌いますか」と尋ねると「ドングリコとドングリは同じ、節が一緒だから同じものと思っていた」という答えが返ってきた。

5．挿し絵のドングリの実が広義の実でいろいろである。

童謡画集『講談社の絵本ゴールド版（図版１）』の望月春江氏の絵やひかりのくに『童謡画集４』の駒宮緑郎氏の絵は櫟の実がドングリとして描かれている。

『NHK 日本のうた　ふるさとのうた100曲』「日本のうた　ふるさとのうた」全国実行委員会編ではこの歌を選曲し、“やさしい唱歌の教材を求めて誕生した歌”と、柏の実を写真（図版２参照）で紹介している。

教科書では、この曲が共通教材ではないので改訂年度によって「一年生」になったり「二年生」になったりと取り扱いが変わるが、いずれも丸味をもつ櫟の実で、目鼻を描いたり手足をつけたりしたかわいい坊やが大きく描かれている。

6．初版楽譜を再現することが正しいことだろうか。

楽譜１と楽譜５を対比してみると、問題点が三点ある。

一点は一つの音符に二文字を充てる場合、初版では撥音も含めて次の文字（次の音）を小字しているので、楽譜５（ドレミ楽譜版）で文字の下に音楽記号のスラーのような記号を付けている。つまり一音についた二文字は一音に歌うということであろうか。大正10年頃にはそのように歌わせていたとも充分考えられるので、できれば歌い方の古い資料を捜して確認したいと思う。二点目は「どぢゃう」と「～せう」の言葉の問題である。ドジョウ古くは「どぜう」と表記、「どぢゃう」の表記は比較的あたらしいもの、「～しょう」が「～せう」、国文学者の青木存義作詞の歌の中には二つの異なった表記が出てくるが、ある意味では本当に原本であるかということも疑ってみたくなるのである。三点目は、楽譜の書き方の問題で、一番の歌詞「おいけにハマッテ」と二番の歌詞「しばらくイッショニ」の問題である。①一番を主体としたもの、すなわちシンコペーション形だけ、②一番シンコペーション形、二番を小さい音符でタンタタのリズム形を書き添えたもの、③全く違った形で、一・二番を変えることなく同じでタタタタの十六分音符４個、の三種類がある。教科書や日本童謡協会編楽譜は①の形で初版と同じである。

この〈6〉の項目に関しては歌い方も含めて再度考察したい。

このように教科書をはじめ諸本の実体を眺めてみると、やはり言葉が大切にされていないと言わざるを得ない。澱粉質に富んだ大きなドングリの実が木の枝から北風に吹かれて落ち、コロコロと転がり川に落ち、浮き沈みして流されるその様をドンブリコと表現するのが当然である。言葉を覚え始めの幼児に接する幼児教育者はもちろん幼児と関わる母親は挿し絵に惑わされてドングリコなどと歌ってはいけないのである。歌詞の意味を少し考えれば誤りに気づくことができる。幼稚園や保育園では子どもは教科書を持たない。だから一層教師などはそのことを自覚してきちんと教えるべきであろう。藍川氏が叱咤されるように“幼児教育者よ、自国の歌・子どもの歌にもっと自覚的になろう”と主張したいのである。さらに、藍

川氏の指摘のように、楽譜も原譜を尊重したものであればやはりこれほどまでに歌い間違えられなかったのではないかと考える。

〈雪〉

この歌も二年生の教材で、明治44年に『尋常小学唱歌（二)』（楽譜６）掲載された。雪が降るということは人々の願いであり、多く降れば豊作の予兆と伝えられ、各地に伝承されている雪祭りは豊作の予祝である。全国各地に雪を歌ったわらべうたは数多くあり、これらのわらべうたの影響を受けて出来たのではないかともいわれている[3)]。「雪やこんこ　霰やこんこ」の語源はなにか、粉とも、雪の降る様を表現した擬音、雪が後から後から降ってくる様子とも諸説があるが、作詞者作曲者ともに不詳で、意見の分かれるところである。

池田弥三郎氏によると「雪よ来む来む」つまり「雪よ来い来い」と呼びかけて雪を歓迎する気持ちを表す言葉とされている。

〔「こんこ」を「コンコン」と歌っしまう背景〕

１．音形やリズム、曲調から受ける影響が大きい。

１・３小節のスキップリズムの軽快さが２・４小節目まで流れこみ、しかも最後の音符の次に休符が続き、非常に明るい歌である。また同型反復が多いので乗りやすい。そんな音楽上の特徴から「こんこ」ではなく「コン」の反復と受け取られのではなかろうか。

２．雪を歌ったわらべうたが全国に数多くあり、類型があり、混同する。

宮城・仙台地方の「雪コンコン」、福島の「雨コンコン」、秋田の「霰やコンコン」、京都の「雪やコンコン」、佐賀の「雪やコーロ」、青森の「堅雪かんこ」、ほかに長野や愛知にも類歌がある[4)]。これらのわらべうたを知っているまたは歌った者はそれらのわらべうたと混同して歌ってしまうと推測される。

３．指導者側の指導不足、学習者の歌を良く聴いていない。

文部省は唱歌誕生の当初から今日に至るまで一貫して「雪やこんこ」であって「コンコン」とならないようにと指導をしている。指導書には必ず朱色でアンダーラインを入れて「コンコンと歌わないように」と文字でも警告している（楽譜７）。しかし、非常に多くの人がこのことに気づかず、意識もしていない。楽しく歌っていることは結構だが、楽譜を手にして歌うときは楽譜に依った歌い方を指導すべきであろう。

雪に関して“子どもが雪を歌った最古のもの”として『讃岐典侍日記』の八歳になる鳥羽天皇の歌は有名であり、『徒然草』の「第百八十一段」の話や各地に伝わる雪祭りの行事などを耳にすると、日本人が雪に慣れ親しみ、非常に厳しい雪国ですら雪を歓迎した先人たちの生活をしのぶことができる。雪が降ると子どもも大人も喜んだのである。幼い子どもにして

みれば「こんこ」ではなく「こんこん」と、歌い出しのスキップリズムに流されてしまってもしかたのないことかも知れない。『NHK 日本のうたふるさとのうた100曲』（講談社）では「この歌のリズムからすると“こんこん”と歌ってしまうほうが自然であるかも知れない（67頁）」、また、『子どもの昭和史　童謡・唱歌・童画100』（別冊太陽）で「雪」をあげ、「歌詞に忠実に歌うとすればコンコでなくてはいけないだろうが、‘こんこん粉雪…’という童謡もあり、国語辞典にも、こんこんとは雪または雨の降る様、とあるから、どちらでもよいのではなかろうか。（135頁）」と「コンコン」を容認する記述があるのもこんな背景があるからだろう。

しかし、明らかに間違っている記述があり、天野寧編著の『擬音語・擬態語辞典』（東京堂出版）である。「こんこん」の項目④に「雨や雪などが盛んに降る様子。〔例〕雪や～あられや～　降っては降っては　ずんずん積もる　〔文部省唱歌〕」とある。このような辞典のこんな誤りは見過ごすわけにはいかない。

明治44年に誕生したこの歌はおよそ一世紀もの期間歌われてきたのだが、学校教育の場では、教師用指導書の中で「こんこ」と歌わせるよう指導、「コンコン」とならないよう注意を促してきたのである。やはり創作者の意図を尊重して子どもには歌を教えるべきだと考える。

註

1）藤田圭雄著「戦後童謡の流れ」の佐藤義美（1905～1968）についての記述。『目でみる日本の詩歌⑩』TBSブリタニカ（1987）136頁上段7行－137頁下段15行

2）農家は、家の裏には樫の木を植え、表の庭には花梨を植えていた。“裏で貸して表では借りん”といった豊かな生活への願いを込めていた。

3）『NHK 日本のうた　ふるさとのうた100 曲』「雪」のうたの解説

4）「天体気象の唄」140頁～151頁『わらべうた』町田嘉章・浅野建二編　岩波文庫

参考文献

安田寛（代）著『原典による近代唱歌集成』スバル社　2000
長田暁二編著『日本唱歌名曲集』全音楽譜出版社　1998
藤田圭雄監修『増補新訂 日本童謡史』日本コロンビア株式会社　1990
与田準一編　『日本童謡集』岩波文庫　1988
町田嘉章・浅野建二編『わらべうた』岩波文庫　1962
堀内敬三・井上武士編『日本唱歌集』岩波文庫　1959

資料Ⅰ　「どんぐり　ころころ」

初版楽譜『かわいい唱歌』

（楽譜１）「團栗ころころ」大正10年（1921）

『童謡唱歌名曲全集』名著出版刊行版より　平成元年

第四期　国定教科書

「どんぐり　コロコロ」『二年生のおんがく』文部省　昭和22年

音楽教育図書株式会社版教科書

（楽譜２）「どんぐり　ころころ」『統合版たのしいおんがく２』　昭和36年

「どんぐり　ころころ」『統合版たのしいおんがく２』　昭和40年

「どんぐり　ころころ」『統合版たのしいおんがく２』　昭和43年

（楽譜４）「どんぐり　ころころ」『統合版たのしいおんがく２』　昭和46年

「どんぐり　ころころ」『統合版たのしいおんがく２』　昭和48年

「どんぐり　ころころ」『統合版たのしいおんがく２』　昭和50年

「どんぐり　ころころ」『統合版たのしいおんがく２』　昭和52年

東京書籍株式会社版教科書

該当曲なし　『あたらしいおんがく１・２』　昭和27年

「どんぐり　ころころ」『改訂あたらしいおんがく１』　昭和29年

「どんぐり　ころころ」『あたらしいしょうがくおんがく２』昭和32年

「どんぐり　ころころ」『あたらしいおんがく２』　昭和36年

「どんぐり　ころころ」『新編あたらしいおんがく１』　昭和40年

「どんぐり　ころころ」『あたらしいおんがく１』　昭和46年

「どんぐり　ころころ」『新訂あたらしいおんがく１』　昭和49年

該当曲なし　『新編あたらしいおんがく１』　昭和52年

該当曲なし　『あたらしいおんがく１』　昭和55年

該当曲なし　『改訂あたらしいおんがく１』　昭和58年

該当曲なし　『新編あたらしいおんがく１』　昭和61年

該当曲なし　『新訂あたらしいおんがく１』　平成元年

該当曲なし　『あたらしいおんがく１』　平成４年

該当曲なし　『新編あたらしいおんがく１』　平成７年

該当曲なし　『新訂あたらしいおんがく１』　平成12年

該当曲なし　『新訂あたらしいおんがく１』　平成12年
「どんぐり　ころころ」『うたのほん 養護学校(精)小学部１～６学年用』
平成５年

音楽之友社版教科書

「どんぐり　ころころ」『おんがく　しょうがく二ねんせい』　昭和27年
「どんぐり　ころころ」『おんがく　しょうがく二ねんせい』　昭和28年
「どんぐり　ころころ」『改訂新版おんがくしょうがく一ねんせい』昭和31年
「どんぐり　ころころ」『改訂版しょうがくせいのおんがく１』　昭和34年
「どんぐり　ころころ」『総合しょうがくせいのおんがく１』　昭和36年
「どんぐり　ころころ」『おんがく　１ねん』　昭和40年
「どんぐり　ころころ」『新訂　おんがく１ねん』　昭和43年
該当曲なし　『新版しょうがくせいのおんがく１』　昭和46年
該当曲なし　『改訂新版しょうがくせいのおんがく１』　昭和49年
該当曲なし　『精選しょうがくせいのおんがく１』　昭和52年
該当曲なし　『精選しょうがくせいのおんがく１』　昭和55年
該当曲なし　『改訂しょうがくせいのおんがく１』　昭和58年
該当曲なし　『しょうがくせいのおんがく１』　昭和61年
該当曲なし　『改訂しょうがくせいのおんがく１』　平成元年
該当曲なし　『新編しょうがくせいのおんがく１』　平成４年
該当曲なし　『小学生のおんがく１』　平成７年
（この版を最後に教科書から撤退）

教育芸術社版教科書

「どんぐり　コロコロ」『二年生のおんがく』　昭和26年
「どんぐり　コロコロ」『二ねんせいのおんがく』　昭和28年
「どんぐり　コロコロ」『二ねんせいのおんがく』　昭和29年
「どんぐり　ころころ」『おんがく２　ONGAKU』　昭和31年
「どんぐり　ころころ」『おんがく２　ONGAKU』　昭和32年
「どんぐり　ころころ」『おんがく２　ONGAKU』　昭和33年
「どんぐり　コロコロ」『二ねんせいのおんがく』　昭和36年
「どんぐり　ころころ」『二ねんせいのおんがく』　昭和40年
「どんぐり　ころころ」『新版二ねんせいのおんがく』　昭和43年
（楽譜３）「どんぐり　ころころ」『２年生のおんがく』　昭和46年
「どんぐり　ころころ」『２年生のおんがく』　昭和49年

該当曲なし	『１年生のおんがく』	昭和52年
該当曲なし	『しょうがくせいのおんがく１』	昭和55年
該当曲なし	『しょうがくせいのおんがく１』	昭和58年
該当曲なし	『しょうがくせいのおんがく１』	昭和61年
該当曲なし	『改訂小学生のおんがく１』	平成元年
該当曲なし	『小学生のおんがく１』	平成４年
該当曲なし	『小学生のおんがく１』	平成７年
該当曲なし	『小学生のおんがく１』	平成12年

教育出版株式会社版教科書

「ドングリ　ころころ」	『口をそろうて』２年用	昭和24年
「どんぐり　ころころ」	『しょうがくせいのおんがく２』	昭和27年
「どんぐり　ころころ」	『しょうがくせいのおんがく改訂版２』	昭和28年
「どんぐり　ころころ」	『標準しょうがくせいのおんがく２』	昭和30年
「どんぐり　ころころ」	『総合しょうがくせいのおんがく２』	昭和34年
「どんぐり　ころころ」	『標準しょうがくせいのおんがく２』	昭和36年
「どんぐり　ころころ」	『新版　標準おんがく２』	昭和40年
「どんぐり　ころころ」	『新訂　標準おんがく２』	昭和43年
「どんぐり　ころころ」	『新版　標準おんがく２』	昭和46年
「どんぐり　ころころ」	『改訂　標準おんがく２』	昭和49年
「どんぐり　ころころ」	『新版　おんがく２』	昭和52年
該当曲なし	『しょうがくおんがく１』	昭和55年
該当曲なし	『改訂しょうがくおんがく１』	昭和58年
「どんぐり　ころころ」	『改訂　しょうがくおんがく１』	平成元年
該当曲なし	『新版おんがく１』	平成４年
該当曲なし	『新版おんがく１』	平成７年
該当曲なし	『小学校音楽 音楽のおくりもの１』	平成12年

童謡画集

（図版１）「どんぐり　ころころ」絵・望月春江『童謡画集　ゴールド版』講談社　昭和40年

「どんぐり　ころころ」画・駒宮緑郎『童謡画集』斎藤晴彦編ひかりのくに株式会社　昭和60年

「日本のうたふるさとのうた」全国実行委員会編の楽譜
（図版２）「どんぐり　ころころ」『NHK 日本のうた　ふるさとのうた　100曲』講談社
平成３年

幼児教育者養成用の教科書または参考本の楽譜
（楽譜５）「どんぐりころころ」『こどものうたベストテン』板東貴余子編ドレミ楽譜
平成６年

日本童謡協会編の楽譜
「どんぐり　ころころ」『日本の童謡200選』音楽之友社　昭和61年

資料II　「雪」

第一期　国定唱歌教科書
（楽譜６）「雪」復刻版の楽譜『新訂　尋常小学唱歌　第二学年用』文部省　昭和７年

東京書籍株式会社版教科書

該当曲なし	『あたらしいおんがく１・２』	昭和27年
「ゆき」	『改訂あたらしいおんがく２』	昭和29年
「ゆき」	『あたらしいしょうがくおんがく１』	昭和32年
「ゆき」	『あたらしいおんがく２』	昭和36年
「ゆき」	『新編あたらしいおんがく２』	昭和40年
「ゆき」	『あたらしいおんがく２』	昭和46年
「ゆき」	『新訂あたらしいおんがく２』	昭和49年
「ゆき」	『新編あたらしいおんがく２』	昭和52年
「ゆき」	『あたらしいおんがく１』	昭和55年
「ゆき」	『改訂あたらしいおんがく２』	昭和58年
「ゆき」	『新編あたらしいおんがく１』	昭和61年
「ゆき」	『新訂あたらしいおんがく１』	平成元年
該当曲なし	『あたらしいおんがく１・２』	平成４年
該当曲なし	『新編あたらしいおんがく１・２』	平成７年
該当曲なし	『新訂あたらしいおんがく１・２』	平成12年

音楽之友社版教科書

	「ゆき」	『おんがく　しょうがく二ねんせい』	昭和27年
	「ゆき」	『おんがく　しょうがく二ねんせい』	昭和28年
	「ゆき」	『改訂新版おんがく　しょうがく二ねんせい』	昭和31年
	「ゆき」	『改訂版しょうがくせいのおんがく２』	昭和34年
	「ゆき」	『総合しょうがくせいのおんがく２』	昭和36年
	「ゆき」	『おんがく　２ねん』	昭和40年
	「ゆき」	『新訂　おんがく２ねん』	昭和43年
	「ゆき」	『新版　しょうがくせいのおんがく２』	昭和46年
	「雪」	『改訂新版しょうがくせいのおんがく２』	昭和49年
	「雪」	『精選しょうがくせいのおんがく２』	昭和52年
	該当曲なし	『精選しょうがくせいのおんがく２』	昭和55年
（楽譜７）	「ゆき」	教師用指導書『精選小学生の音楽』	昭和55年
	該当曲なし	『改訂しょうがくせいのおんがく２』	昭和58年
	「ゆき」	『しょうがくせいのおんがく１』	昭和61年
	該当曲なし	『改訂しょうがくせいのおんがく１・２』	平成元年
	該当曲なし	『新編しょうがくせいのおんがく１・２』	平成４年
	該当曲なし	『小学生のおんがく』	平成７年

教育芸術社版教科書

「雪」	『二年生のおんがく』	昭和26年
「雪」	『二ねんせいのおんがく』	昭和28年
「雪」	『二ねんせいのおんがく』	昭和29年
「ゆき」	『おんがく２　ONGAKU』	昭和31年
「ゆき」	『おんがく２　ONGAKU』	昭和32年
「ゆき」	『おんがく２　ONGAKU』	昭和33年
「ゆき」	『二ねんせいのおんがく』	昭和36年
「ゆき」	『二ねんせいのおんがく』	昭和40年
「ゆき」	『新版二ねんせいのおんがく』	昭和43年
「ゆき」	『２ねんせいのおんがく』	昭和46年
「ゆき」	『２ねんせいのおんがく』	昭和49年
「ゆき」	『２ねんせいのおんがく』	昭和52年
「ゆき」	『しょうがくせいのおんがく２』	昭和55年
「ゆき」	『しょうがくせいのおんがく１』	昭和58年

該当曲なし『しょうがくせいのおんがく１』　昭和61年
該当曲なし『改訂小学生のおんがく１』　平成元年
該当曲なし『小学生のおんがく１』　平成４年
該当曲なし『小学生のおんがく１』　平成７年
該当曲なし『小学生のおんがく１』　平成12年

教育出版株式会社版教科書

「雪」　『口をそろえて』２年用　昭和24年
「ゆき」　『しょうがくせいのおんがく２』　昭和27年
「ゆき」　『しょうがくせいのおんがく改訂版２』　昭和28年
「ゆき」　『標準しょうがくせいのおんがく２』　昭和30年
「ゆき」　『標準しょうがくせいのおんがく２』　昭和36年
「ゆき」　『新版　標準おんがく２』　昭和40年
「ゆき」　『新訂　標準おんがく２』　昭和43年
「雪」　『新版標準おんがく２』　昭和46年
「雪」　『改訂　おんがく２』　昭和49年
「ゆき」　『新版　おんがく２』　昭和52年
「ゆき」　『しょうがくおんがく２』　昭和55年
「ゆき」　『改訂しょうがくおんがく２』　昭和58年
「ゆき」　『新訂しょうがくおんがく２』　昭和61年
該当曲なし『改訂しょうがくおんがく２』　平成元年
該当曲なし『新版　おんがく１』　平成４年
「ゆき」　『新版　おんがく１』　平成７年
該当曲なし『小学校音楽　音楽のおくりもの』　平成12年

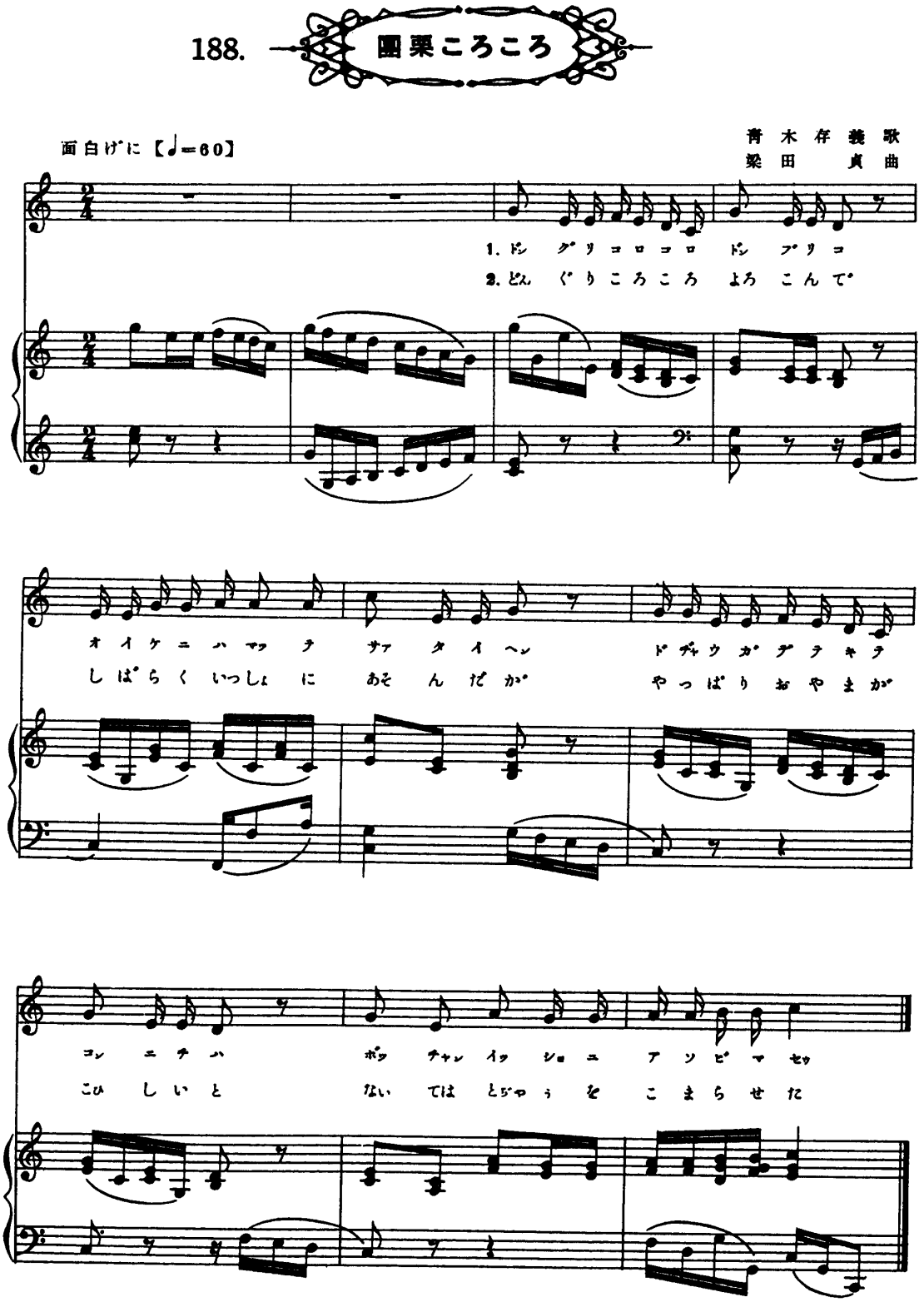
童謡画集

「ユキ」絵・川上四郎　『講談社の絵本　自然界のいろいろ』　昭和14年
『子どもの昭和史　童謡・唱歌・童画100』秋山正美解説　別冊太陽　平凡社
平成７年

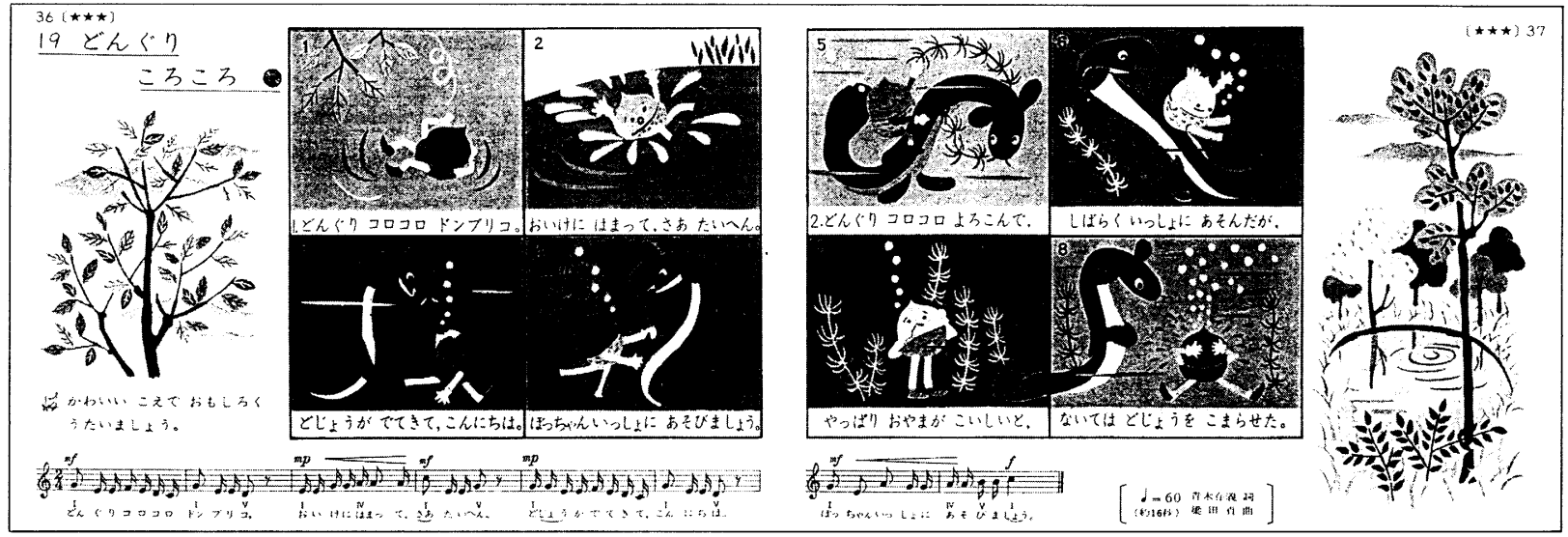
「日本のうたふるさとのうた」全国実行委員会編

「雪」『NHK 日本のうた　ふるさとのうた100曲』講談社　平成３年

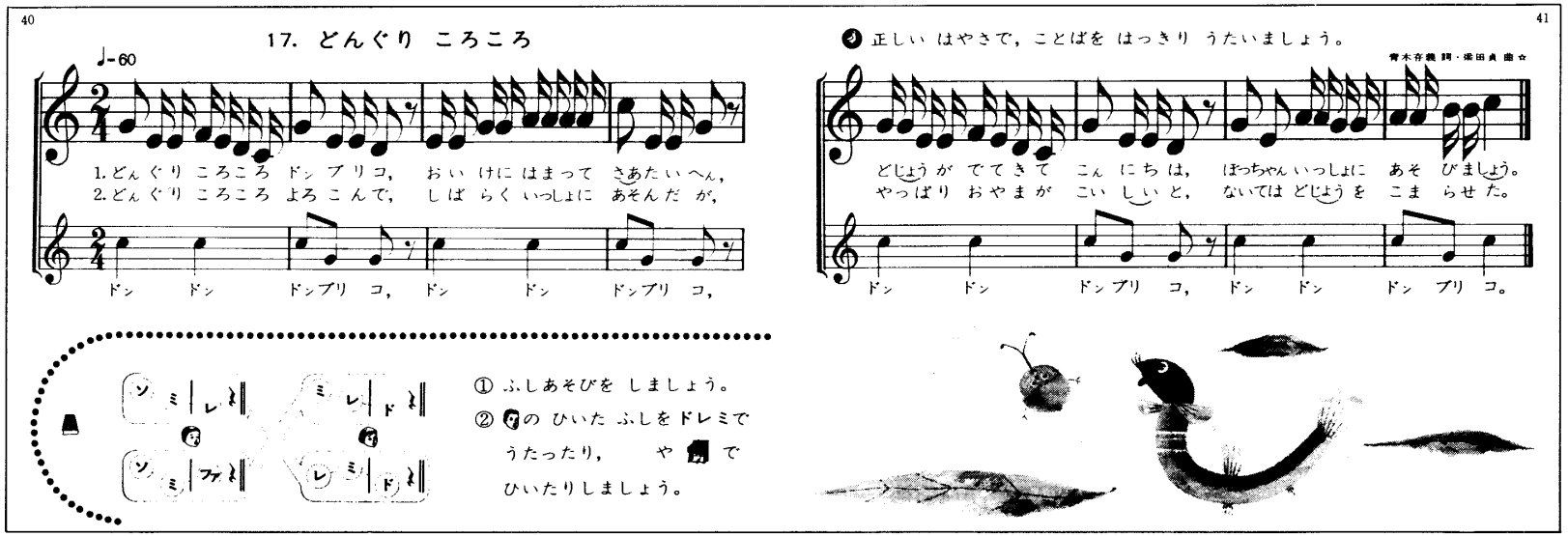
（楽譜１）初版楽譜大正10年『かわいい唱歌』より



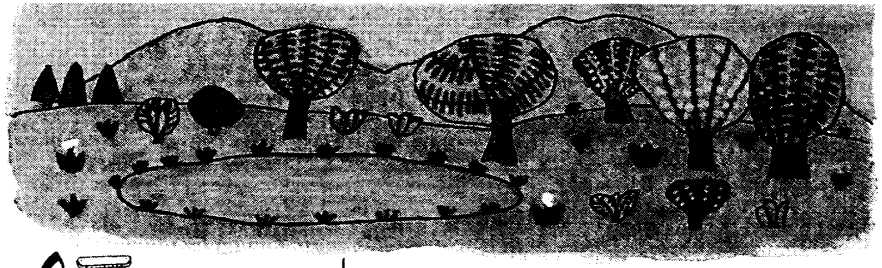
（楽譜２）昭和36年『統合版たのしいおんがく２』音楽教育図書版より

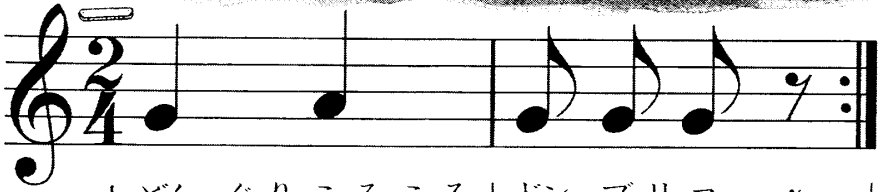


（楽譜３）昭和46年『２年生のおんがく』教育芸術版より



（楽譜４）昭和45年『統合版たのしいおんがく２』音楽教育図書版より

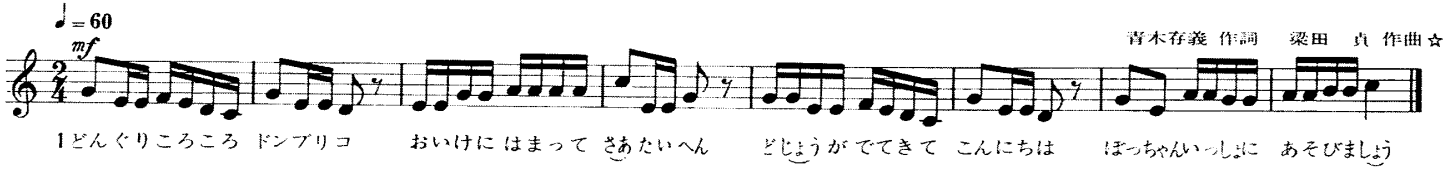




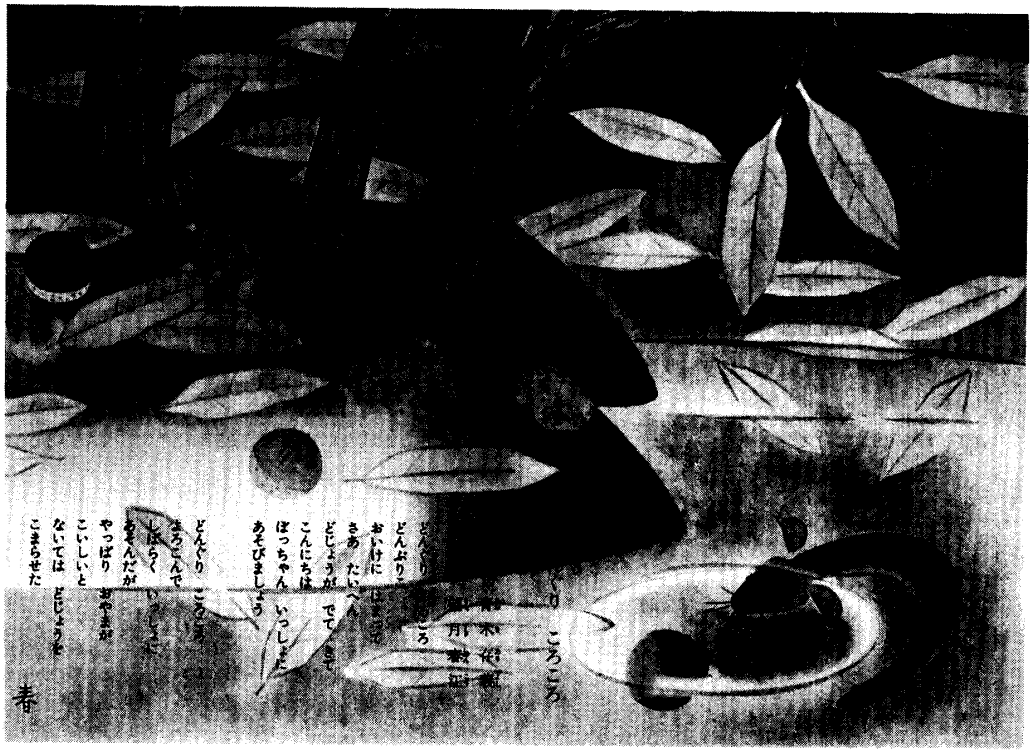
1 どん ぐり ころころ | ドン ブリコ ッ |
おいけにはまって | さあ たいへん ッ |
どじょうがでてきて | こん にちは ッ |
ぼっ ちゃんいっ しょに | あそびましょう ‖

2 どん ぐり ころころ | よろこんで ッ |
しばらくいっ しょに | あそんだが ッ |
やっ ぱりおやまが | こいしいと ッ |
ないてはどじょうを | こまらせた ‖

の ふしの リズムを
かきましょう。



（図版１）昭和40年『童謡画集　ゴールド版』講談社より



（図版２）平成３年『ＮＨＫ日本のうたふるさとのうた100曲』講談社より

野々村　千恵子

（楽譜５）平成６年『こどものうた　ベストテン』ドレミ楽譜より

どんぐりころころ

●青木存義 作詞／梁田 貞 作曲／橋本晃一 編曲

Andante（かわいらしく）

C　F　C　F　G7　C　C　F

mf

1.どん　ぐ　り　こ　ろ　こ　ろ
2.どん　ぐ　り　こ　ろ　こ　ろ

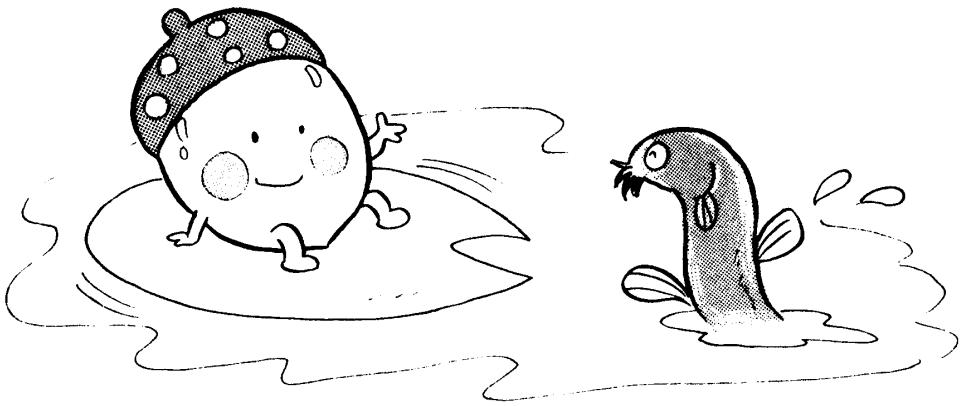
C　G7　C　F　C　G7

どん　ぶ　り　こ　　お　い　け　に　は　ま　っ　て　　さあ　た　い　へ　ん
よろ　こ　ん　で　　し　ば　ら　く　い　っ　しょ　に　　あそ　ん　だ　が

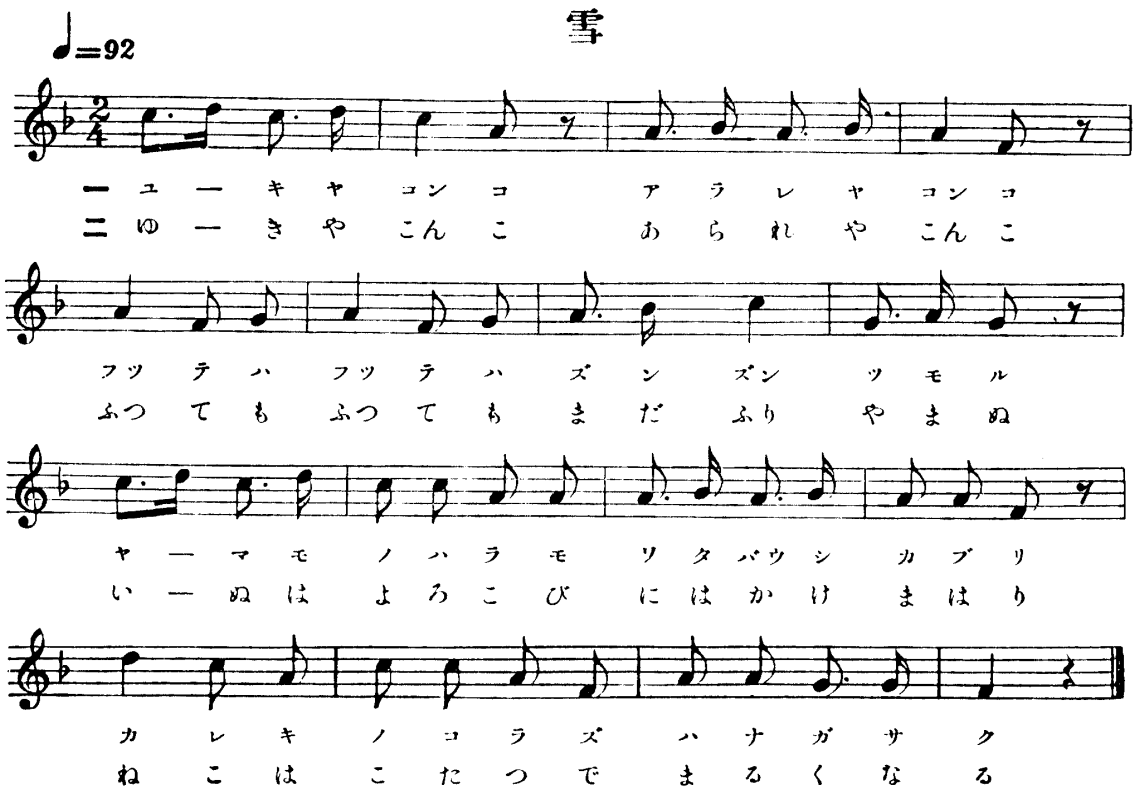
C　F　C　G7　C　F　C　F　G7　C

どじょう　が　で　て　き　て　　こん　に　ち　は　　ぼっ　ちゃん　いっ　しょ　に　　あ　そ　び　ま　しょう
や　っ　ぱ　り　お　や　ま　が　　こい　し　い　と　　ない　ては　どじょう　を　　こ　ま　ら　せ　た

●**指導のポイント**●　秋になると必ず歌われますね。前奏の２小節は、急がないで弾いて下さい。

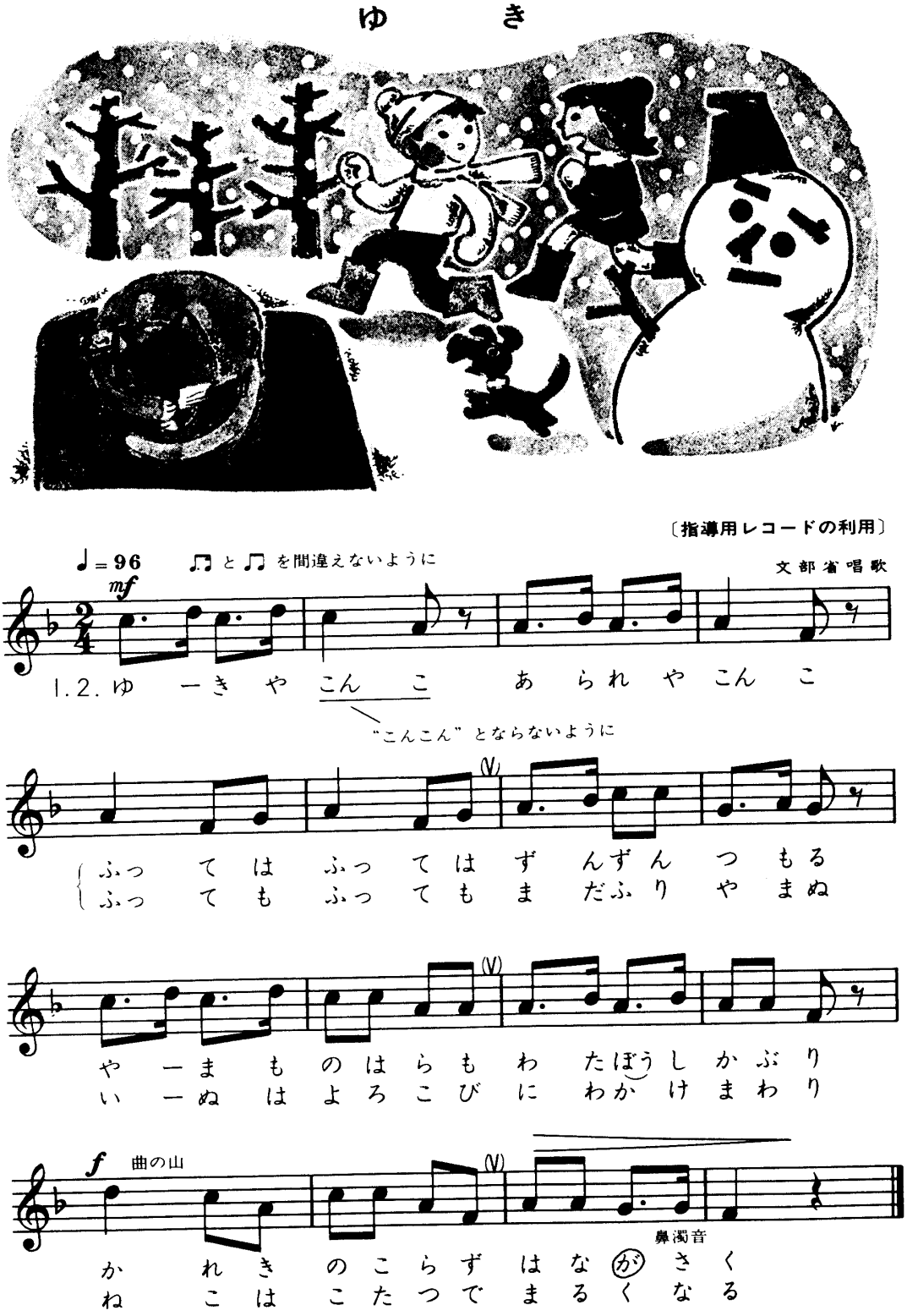


（楽譜６）明治44年　第一期　国定教科書より



二四、雪

一、雪やこんこ、霰やこんこ。
降つては降つては、ずんずん積る。
山も野原も綿帽子かぶり、
枯木残らず花が咲く。

二、雪やこんこ、霰やこんこ。
降つても降つても、まだ降りやまぬ。
犬は喜び庭駆けまはり、
猫は火燵でまるくなる。

（楽譜７）昭和55年『小学生の音楽２』教師用指導書　音楽之友版より